



洋雜記

四

柳田文庫
文庫11
A1834
4



越後中蒲
原郡日井
新田氏印

文庫11
A1834
4

西洋雜記卷四

大目録

- 印度小鳥の説
- 南亞墨利加の大鳥の説
- 地生羊の説
- 海牛の説
- アヂムナイム獸の説
- 亞墨利加の異猿の説
- ドトアルス鳥の説
- 白孔雀白雞白猪白熊の説

西洋雜記卷四

柳田泉文庫

印度の異木の説

鐵島水樹の説

太懶毒辣の説

アダムス。アツフルの説

象并象牙の説

オホソシユム獸并セミヒルバ獸の説

亞弗利加の大獸の説

アソウハ獸の説

大蟹の説

水蛇の説并水蛇石の説

雞石の説

西洋言語の説

硝子を柔よする法

屋室并扱糞の説

西洋疔瘡の説

西洋産婆の説

譚談

藥を服せむるよき飲食をせむる方

薔薇をくぐ香窟をくぐむる法

卵中よ文字を書するの法

石上よ文字をなす法

金の量を重くする法

猩ニ絨を染むる小蟲の説

ゴウテ。ヒツスの説

則意蘭島の異草の説

工鄂國の奇鳥の説

亞空并其美の説

飯子と茶と其説

西洋雜記の巻

卷四の終

西洋雜記卷四

印度小鳥の説

印度の地は一種の小鳥を産り、其名を「キュアイシム」と
名く。波尔杜瓦爾國人ハよんで「ペカフロル」といふ。其羽毛
甚美麗なりて、全體の大き、僅ハ蝗の如く、頭の大さは
櫻子の如く、喙ハ黒く、長く尖り、直ハ其細き
線の如く、足ハ全體ハ比す、甚小なりて、色黒く、尾ハ
長く直りて、僅ハ三四羽あり、此小鳥の羽毛、甚滑澤
光彩ありて、日ハ映する時ハ、其美麗なるを、まことに常ハ



倍り。印度の人此鳥を佛像の前よ蓄ひく。是よ餌よ諸花を以てり。相傳ふ性きもめて花を好く。其地方花少る候よ至るバ喙を以て樹幹を穿ちて孔を作り。其中よ入る隠し蟄して動らざる。半年餘花盛なるの候を待ちくすなをち出づといふ。

南亞墨利加の大鳥の説

南亞墨利加洲字露等の國一種の奇異なる大鳥哉産り。名々「コンドル」といふ。此鳥の身軀きもめく大よして。能羊鹿を攫みく高飛り。其翅を開く時ハ一方の翅端より一方の翅端まで長さ凡五「エルレン」及一「エルレ

に四分の三よりなる者あり。

一「エルレン」ハ此方の曲尺二寸四分餘の事なり。五「エルレン」四分の三より大

尺は當るなり

其足は爪なり。

故は足を以て人物に害を

なすことあり。然るも喙ハ甚尖利なり。よよく

牛皮を透す。うつて一牛を此鳥二隻空より飛下り左

右より牛皮を刺透して殺せる事あり。また或小兒

を刺殺して攫み去り。此鳥其羽ハ黑白斑文

となりて。其色も美なり。頭は冠あり。黯赭色をな

し。前よむらして垂る。其形ハ鴈吐鵝雞に類して。

其色赤。字露等の人神を祭ると。此鳥の羽を供

して福を祈るといふ。

地生羊の説

鞞タルタリヤ而鞞部中「サノタ」等の地は一種の奇物を産ひたまふと「ラテン」語ハ「アグニユス」シケイチキユム「ラテン」語「アグニユス」は羊なり「シケイチ」ハハ古の北方の國の名漢は是「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」的要と譯するものなるなり又「アグニユス」ヘケタベリス「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」ハ生類「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」又「タツタリセ」ラム「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」又「シケイチセ」ラム「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」ハ羊の義「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」又「ボラメ井ス」といふ是の地の土人一種の西瓜「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」に似て西瓜より少短き種子を蒔けばすたすち一の草莖「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」を生べ其莖高きこと三尺許「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」ハ一の羊の如くなる形のもの其莖は纏「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」ひ生じて其臍「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」ハ

莖と相連り其頭おどび手足等皆具をり又其頭の角を生ずべきの所は一束の毛叢「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」生じてや高くあつても角を備へたるは似たり其物熟するは後がいて莖を次第は枯槁して身は皮毛を生ず内は薄き白膜あり其毛柔「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」くして卷曲愛すべく其近傍四面は生ずるところの他の諸草ハ日を追ておどく萎「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」み腐つけば此羊の食らへるは似たりいんとなきハ人なり其近傍の草を刈るときは此羊すなりち枯るがゆゑなり是ときこむ赤き液汁あり出づあたると血の如し其肉の肉ハ其味蝦「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」或蟹「ラテン」語「アグニユス」ハ「ケタヘリ」の肉の如く且甚甘美なり鞞鞞の人

の羊の皮を採り中とありて頭を包く。其他衣服器用
 玩好の物となり。其まじりて。此羊熟するのころあひのち
 狼らの獸来りて。是は啖さんごとと欲す。故に土人心を用ひ
 て諸の野獸を防ぐ。甚密なり。然して其皮を歐
 羅巴洲中より輸す。其のハ質物なり。として先哲す。て
 多く是を明白とせり。いふんとあは。皆東方印度の邊
 より生ずるところの大羊の胎内より何れも羔の皮を剥き取
 りて偽造するものなればなり。其草茎は生ずるところ
 の羊皮の真物の如きハ。歐羅巴洲においそ。ハ是を見ると
 稀なり。

右ハト、子ウスが本草。あよび「ウライフ」が醫學
 寶函に載すところの説りて。其言ふところ本
 草綱目よりしる地生羊と大抵相同し。故に今下
 よ本草綱目あよび史記の註に載すところの説
 と録して。あつて考證する所なり。

本草綱目羊部附録に曰。地生羊出西域。劉郁出使
 西域記。以羊臍種于土中。溉以水。聞雷而生。臍二與
 地連。及長。驚以木聲。臍乃斷。便能行。齧草至秋可食。
 臍内復有種。名壠種羊。段公路北戸録云。大秦國有
 地生羊。其羔生土中。國人築牆圍之。有臍與地連。割

之則死但走馬擊鼓以駭之驚鳴臍絕便逐水草吳
 菜淵頴集云西域地生羊以脛骨種土中聞雷聲則
 子從骨中生走馬驚之則臍脫也其皮可為褥一云
 漠北人種羊角而生大如兔而肥美三說稍異未知
 果種何物也當以劉說為是然亦神矣造化之妙微
 哉

まゝ史記大宛傳の註小宋膺が異物志を引く曰
 大秦之北附庸小邑有羊羔自然生於土中候其欲
 萌築牆繞之恐獸啖食其臍與地連割絕則死擊物
 驚之乃驚鳴臍遂絕則逐水草為群と見えたり

海牛の説

亞墨利加の海中一種の獸を産り名けく「マナチ」といふ
 和蘭の人ハ「セエグウ」といふ海牛といふ義なり是すちらち一種の
 身體不具の獸なり其前の二足ハあきを用ゐるのうゝも
 頗手シヤノ類す全身赭色其頭顱ハ野羊ノ似て口ノ犢牛
 ノ類ハ眼小鼻孔大ノて耳ノなり尾ハ短くて圓ノ
 體の大き牛の如しそれ大なるも此ハ長さ一丈五六尺徑
 七八尺に至るものあり恒々海中に生ざるところの草を
 食ふ其頭中ノ石あり色白くく鈍圓其形象骨ノ類
 似香氣ノよび味ノなり主治ノつら痛を止るノ用ノ腎

あよび腰痛拘攣癩疝癥瘕等は用ゐる効有り。また外傳の藥も用ゐるなり。

「アテムナイム」獸の説

アフリカ洲中利未亞奴未第亞等の地においゝ其人多く「アテムナイム」といへる獸を畜ふ其大さる犢牛の如く形ハ羊に似たり耳たがくうろろ垂る毛短くして甚柔よ乳汁甚多し身よ力有りよく人を負く行よ足る此獸他は異なるものハ牝なるもの角ありて牡は角なくつゝ角なきなり。

「アメリカ」の異猿の説

南亞墨利加洲伯西兒マラゲナン等の地は一種の猿を産り名を「カヨウ」といふ全身毛甚多く灰白色の長髪あり眼黒く耳禿よ尾ハ甚長くその面貌ありて老人よ肖するなり。

「ドトアールス」鳥の説

印度亞の属島「マウリシウス」の地は一種の大鳥を産り名けて「ドト」ます「ドトアールス」といふなり「ストロイス」ホーゴル鳥の種類なり或はつて天鷲の種といふその頭よ膜皮有りて是を掩ふと「モンニキ」の名の戴くとあるの中よ似たり故にますと號して「モンニキ」スワーニと

ハスワリン^ハ天鷲^チ其形状ヤ、^カ駝鳥^カに似テ、^{セキ}吐綬^{セキ}雞^カに類
す。此鳥肉甚多ク、一^{セキ}隻^カの肉を以テ、よく百餘人
の食に供するも、是る其味も亦甚美なり。

白孔雀白雞白猪白熊の説

北方^ゴ極寒の諸地方、殊に^{キウロツ}歐羅巴洲^ノ、^{シベ}諾尔勿^ア入亞國^アの地、
おむく一種の白孔雀を産し、羽毛も亦奇麗に、
其雌もあるもの、雪深き山中におむく、卵を雪中に藏め
て、よく是を生育し、又一種^イの白雞あり、名けく「ス子^イ子^イ
。フウ^ン」^ハと^ハいふ^ハ、^ハ雪雞^ハ、その大き鳩の如く、性又雪を食む
まゝ、^ム莫斯哥^ゴ未亞^アおむく^ハ「^ハエイ^ス。ラ^ンド」^ハ、白猪白熊と

産し、^カカ^ル^ンラ^ンド^ド臥兒狼徳の海中に一種の稍白色なる^ク鯨^ラを
産し、^ハオ^シキ^トウ^ヰツ^テ。ヒ^ツス^ハ、^ハ白魚^ハと名く、蓋北方の寒地
よかく白を生類を生ずるも、南方黑人國の人ハツヤ、及
てハ^ハ雞^トと^ハ黒^トと^ハ相反せり。

印度の異木の説

東方印度の地、一種の異木を産し、其樹枝東にむし
るのハ、大良薬にして、諸般に病患に用む、極め効あり、
西にむしるのハ、大毒有りて、誤り服せしバ人を殺し、
其理詳よまゝ、^ハハ^ハを得ずといふ。

鐵島水樹の説

アフリカ・ビレドレケルト
亞弗利加洲皮力土爾熱利土國の南海中は十餘島の
り。總稱して「カナアリア」といふ。みな伊斯把亞國の
王に屬し其最西の島を「ヘルロ」と名くす。エイ
セル。エイランド」と名く。其は鐵島といふ義なり。此島
は一種の奇樹を産じ。和蘭の人呼んで「ワートル」。ボオム
といふ。水樹の義。其枝葉恒は清水を滴下し。若日光を受むと
其水滴ると最多し。故に土人とも桶鉢の類を多く樹下
に置きて其水を受く。此島中絶えず水泉なりといふ。と
て此水を日用に供し。少く事を缺くことあり。といふ。造
化の功妙なるを故に稱して聖水といふ。ちよ一千四

百零二年 日本應永九年。唐土明の フランクス
建文四年壬午に當る。 小拂郎察國「ガルマンデー」

の人ベテニコウルトといふ者。此島より。此水の奇状を
見て其著すところの書に記録してより。諸の西書家の
水の事を載るもの甚多し。トト子ウスガッソウ。是猶
我歐羅巴洲所産の「リシダウ」草日露の義の日中に至ると
水も滴下して地を濕すが如きもの。然るも我より
彼島に至りて。此奇樹を観るを得。故に此理を
詳に窮むるを得ずと記せり。

太懶毒辣の説

意太里亞國に屬する。那波里國の内「タレント」の地におび

其近傍西齊里亞哥尔西加等の諸島、一種の毒蟲を産じ、あそを名け、太懶毒棘といひ、又ステルリオ子といふ。和蘭の人ハ呼ん、^{「トルレス・ピニ子コッフ」といふ}狂蜘蛛（蜘蛛の類なり）人々、あそを螫さると其毒は、いづこが、則狂するが如く、或舞ひ、或歌ひ、或怒り、或笑ふ。故に、此症を名ぞく、「ラテン」の語は、「タラシチス・ユス」といひ、和蘭の語は、「ダンス・シ井キテ」といふ。^{「ダンスハ舞踏なり、シ井キテハ病なり、あそを療さるるハ其病人を轎子の中に入る、四隅は綱をつけ、高を懸け、是を推廻す、まばちの轎子旋轉して、まよひ、此時はおろく、人々の傍}

に在り、其病人の平生好むところの樂を奏すと、病人すた、もち醒る、平愈り、然るのち藥をいづく、是を治すといふ。

「アダムス・アップル」の説

和蘭語、佛手柑を謂て、「シットルウン」といふ、其一種大なるものを「アダムス・アップル」といふ、其状橙橘の類と、同く、いづく、橙子より大なる、二三倍、外面は少の斷紋ありて、拾人の齒をいづく、咬むたる状、同、是太古の世、世界開闢する時、人の始祖、^{「アダム」}此菓三枚を取り、是を喰ひ、噉、いづく、故に名け、^{「アダムス・アップル」}

フルと云ふ。そのもも「ヨーテン」の人 上古の如徳亞人の子孫あり。上巻に見ゆ。
みな家畜と云ふ。毎年此菓一枚を採りて其神に供ふ。故に
まゝ此菓を世に称して「ヨーテン・アップル」といふ。

象并象牙の説

ヒブ子ルスが萬國傳信紀事ふりて、象ハ西語「オリハン
ト」より「エレハス」といふ。あま四足生類の中におひて最
大也且猛也。又靈慧なりて、まゝよく人よ馴れ、其役使
するところも後ふ。其天性野猪龍鼠および燕を惡む。枕が五雜組
は曰象畏鼠 印度および亞弗利加洲の人ハ此獸をりて戰
は用る。つとせ上は騎るをもたぬ。此獸二の長牙ありて

口より一々外は向ひて出づ。是すたもち世より知
るるもの。その「エルペンベエン」たるを又其鼻甚長し。
是を名をて「フロポスミス」といふ。その鼻をりて人の
手をつつふ。諸般の事よ用る。此獸多く亞細亞
洲中よ産れ然して殊も多し。亞弗利加洲の亞毘心域
莫拿莫太巴「モノエモギ」等の諸王國の地および則意
蘭島よ産れ。按、輿地圖説、セイランの象ハよく人語はく其
と解し、重きを荷ふ。遠きは致さずといふ。 其
最大のものハエ鄂國より産れ。此國より出ればその象其
牙二百餘斤の重きあると上
巻申す。 象ハ其壽よく一百五十歳を保つといふ。
ウライツが醫學寶函よ曰、象ハ大獸なりて東方印度

および黒地兀皮エナオヒアアフリカ洲黒諸國の地は産人其牙
 を薬用は供するがためは生薬舗より是を求む是を名
 ぞく「ラテン語」エビュルといふ和蘭語は「エイホール」
 といふ此牙甚大ありてその徑ワタリおのび圍カサミもすく是は称
 ふ其外面ハ黄ありて裡面ハ白し其獸大小よきこして
 此牙の大小輕重あり故は其重さ五六十「ポント」より
 して或百餘「ポント」よりある者あり。「ポント」ハ量の名薬用の
「ポント」ハ「ポント」の專き
九十六錢あり。詳
下卷に見ゆ。然して其牙の状全なるものを彼産する
 地方より我欧羅巴は輸イタ來る者ありと名ぞく「エド
 ルインテグリウム」まゝ「インフラグメンタ」といふ醫家は

おのびスリク屑スリクとたりて是を用ふちを「ラテン語」ラシ
 ラ。エホリス」といひ和蘭語は「グラスプト。エイホール」といふ
ちらひは擦象
牙とく義その屑よく諸種の熱症黄痘ダンおよび脾肝二
 臓の閉塞するに用ゐる功あり其外尚ち色を火で焼く
 用ゐるものあり。ちを名ぞく「エビュル。ウストム」といふ此
 品まゝ二種を分つ其ハ火氣を外キ洩キく久く焼き白
 色となすものなり。ちを「ポチウム。エキスエボレ」と名
 く其内外面とも白くして量重く質柔脆シラヤイよくて美カシき
 鱗節シラヤイもち此物よく閉塞するの功ありまゝ或ちを
 製して鏡となしたり。下利諸症に用ゐる甚妙なり。

まうよく白帯下を治す其二ハ象牙を壺中ニ固封ト
 て焼くる者有りて其色甚黒一世ハ又或象牙ハ似る
 の大牙と土中より掘得るもの有り其物又外面ハ
 黄くして裏面白く是を舌上よあけバ舌ハ粘著すけ
 たり其の土中より得たるものハ象の牙ハ似る者ハ
 豈象牙の久く土中ニ埋りて土氣薰蒸してかくの
 如く軟たると至るものや或膏腴ある土氣自然ニ凝成
 して牙の如くたる形を結ぶものやいさうぞ知るべからず
 窮理の學家ハ必以此エビル。ホツレレ即掘出すの象牙
 を定めくウニコールニ。ホツレレと其功用を同じくす

くの類なり
 「ウニコールニ。ホツレレ」ハ掘出すの一角なり
 土中より出る者有り。詳ニ医学室函ニ見申。蓋此方より龍骨

「オホツシム」獸并「セミヒル」バ獸の説

アメリカカカリハナ
 亞墨利加洲加里巴納諸島の地ハ一種の獸を産ル名を
 「オホツシム」といふ其大さハ猫のごとく喙ハ尖りて下齧ハ上
 齧よりハ短く喙の状ハあつちと承ハ類似其爪シタバまたあつ
 尖利なり樹木ハ爬カ以上カの事す速スなりよく
 鳥を捕へ是を啖ふ其牝一産大抵六子を生む其腹ハ袋
 有り伸ぶべく縮むる恒トハ其子をその袋中ニ入る
 乳するとのは是を出がハ牡ボなる者ハはく腹ハ袋ハ有りて

其の牝^{ヒシ}と云ふをけく其子と袋中に入きく行き走るるは
ましく亞弗利加洲^{アフリカ}一種の獸なり「セミヒルバ」と名くそ
の形狼より異なりはるの牝^メなるもの肉囊ありその胸
は懸る恒よ子を其内に入きく行走すといふは
の類なり

亞弗利加の大獸の説

亞弗利加洲^{アフリカ}「バムボク」國の西方「カツタ」「ヤカ」等の地一
種の大獸を産れ名々しく「ギアマラ」といふ其大さ象よ
半倍に其頭頸^{ケイ}拾駱駝^{ラクダ}に似く背よ二の大瘤^{ホコ}あり其足甚
長く行歩甚高し頭よ七の角あり各長さ二尺餘色黒く

して其状牛角に類し性獷悍なりといふ人も或あまを
畜し養ひ押さしめてよく重をを負ひ遠きよ致れたゞ行
歩はなましく速ならぬ是は飼ふの食料や駱駝の食料と
類し其の肉ハ黒人の後につく美味とするといふもの
なり

アソウハの獸の説

又亞弗利加洲は異獸あり名けく「アソウハ」又「シアカリ」と
いふ此獸つゆ人の墳墓をほきく其屍を出して是を
食ふなり

大蟹の説

アメリカカ
伯西兒國一種の大蟹を産び名々「ギニアッ
ヒニム」といふ其蟹を開くと其大さ人の股を開きさ
か如くは海に塘中穴を穿ちて是に居り時々
すく陸地を歩き天より雷鳴すにバ則此蟹穴より
出づ人を見む大に號呼して衆を聚めて是を捕
つてもつて食料も何つ其味極めて美なりといふ

水蛇の説并水蛇石の説

イタリヤカラブリアの地の水中に一種の蛇を産び名
々「ボア」といふ其形甚大なり小犢を見むバ則飛で
ちを廻繞してその血を吸ふ人より是に咬まるとバ其

腫脹甚大なり。むろい。邏馬のカラウチウス帝の世小
うつ人何つて此蛇を撃ち殺し其腹中におひく人の
全身備もまる者を得しとありといふ

テモンが奇方秘苑に曰水中に生ずる蛇を捕
つて其尾を樹木に縛り其頭を下りて掛けあぐ時
ハ其蛇早よりバ一時遅ければ一二日の間よりならん一
石を吐き出さん是を水を盆子に盛り蛇頭の下にお
き其石を盆中へ受て尚其水中に漬けて暫時
しその石を取り出さず水腫を病む人の腹上
むすびつけくむすべし腫氣を除き去るといふ

按太平

廣記は狐珠を取ることを載
け、すこぶるちかしく似たり。

雞石の説

まづ奇方秘苑より、ハリー子ン。ステーン和蘭語ハリー子ン
シモ、雞よりステ
エニハ、も生じく四歳を経る雞の肝中におりて、時々
石なり。生じく四歳の者より、其大さ豆の如し。質透明な
生ずるところの者より、其大さ豆の如し。質透明な
るも、恰水晶の如く、是甚貴む。産地の物より、戰場に
臨む時より、是を口中に含めば、あへて渴するもなぐ、且
よく敵を勝つ。リウテマンより、旅行せし時、途
中より、渴し苦みし人より、此石を贈る。因て是を
舌上よのぎ、試むる。即時に渴止みし。

先年予が友人より、雞肝中より、此石を得。以
て予に問ふ。予以為ち、雞の誤りて石を吞み
たるものなると。後、此書を読み、始めて此
石なるんことを知る。當時此書を識らざりて、其
功を試みずして、やむぬるも、恨むべし。惜むべし。

西洋言語の説

萬國傳信紀事より、曰、歐羅巴洲中諸國、其言語の原始、およ
び三種あり。第一、ハラテン意、太里亞の中より、あ
り、舊都の名なり。語なり。第二、
意、太里亞、拂郎、密、伊斯、把、你、亞、等、諸國の言語、由て出ると
ころなり。第三、ハルマ、泥、亞、語なり。第四、和蘭、諸、厄、利、亞、

第那瑪デーチマル加ルカス雪際エシヤ亞等諸國の言語由りて出づるものなり。第三ハ「スラホニア」オシカリアの内ニ属して今ハ入ガアル馬泥亞國帝畿の州郡なり。語なり。おま博厄美亞翁加里亞波羅尼亞莫斯哥未亞等諸國の言語由りて出づるものなり。

按、海を「ラテン語」マレといふ。拂郎察フランスマレハ「メル」といひ、伊イス斯スバ把バ你ニ亞アマレといふ。書籍を「ハル馬泥亞」マレといひ、和蘭オランダマレハ「ブツク」といひ、第那瑪デーチマル加ルカマレといひ、諸厄アンゲリヤ利亞アマレハ「ボツク」といふ。右の如き小異ありて、其原ハみな土地より

一轉音の「マレ」ハ「入セルマ爾マ瑪ニ泥ア亞デーチ第マ那マル瑪ル加カ」語とありて、和蘭オランダの語ニ参考するに、其語多クハ相似あり。諸厄アンゲリヤ利亞アの語も中々異ありて、おまらら同からざる多し。諸厄アンゲリヤ利亞ア國其歴世の沿革エシヤよりて、其語音もさうさう變シと。西書ニ詳あり。おまららの事、少く考ふるものありて、私録する者ありといふ。尚稿カウを脱ダツすものを得、他日是を詳しすべし。録す故、此書ハおまを略して、其大凡を説め。硝子シヤウジを柔ユする法

「シヨメエル」が保家全書小曰野羊の血を以て硝子ニウシを烹ニるとは其柔ヤシクたるを蠟ラフあるは白煙アの如くはなるなり。此時は人その心の欲するが如くしつゝの形はありしを造りてのち是を水中に投ずまば堅きことまじく初ハツの如くしつゝの硝子ハ和蘭語「カラス」としつゝラテン語にてハ「ヒートロム」としつゝ我邦にて「ヒードロ」としつゝ其のラテン語の轉音なり。又按は西洋にて硝子を造るは其原始極めく久ヒサシすたるをち太古洪水よりも以前マの事ありて罷鼻ベルの高臺を建タしすすては多く処ニは硝子を用ゐしなり。

屋室并扱糞の説

歐羅巴洲キウロウパハ人家に石を以て造建ツクれ故は火災絶えり。稀ヒたり其木のをりつゝ造るものハ下賤ゲセンの家なり。又彼方カ測糞ソクフンを掃除サウヂョするはハうたるらび夜をりつゝして白晝カハヤ天日の光あるとあはれりてハ決して糞を掃ふことなり。故は和蘭語ハ扱糞人カクフンを謂て「ナクト。ウエルケル」としつゝナクトハ夜なり。ウエルケルハ業ゴトをなす者としつゝやなり。

西洋疝瘡の説

和蘭語ハ疝瘡カンを呼んで「スパンスポック」としつゝ「スパン

又^イス^パ把^ニ亞^ア國^{ナリ}なり。ポツク^クをすべ^ク瘡^ヲを^シ。

瘡瘡をキンデル。ホツク

 是^トを^シら^フも^トし^テ。昔^キ時^ト歐^ロ羅^バ洲^ノ

諸國ハハたえて此病をうつり。伊^ス把^ニ亞^アの閣^コス

ボス「イタリヤ」國の人より。伊^ス把^ニ亞^ア王^ノの臣^{ナリ}なり。始めて。より

龍^アメ^リカ^洲を見出^ス。其^ノ事^別卷^ニ詳^シん

 始^メす^ル。亞^メ利^カ洲^ヲを開^キ。時^ニ。此^ノ是^ハ相^後

ひく亞^メ利^カ洲^ニ至^リ。軍^卒等^多く^彼地^ニあ^り

く此^ノ病^ヲを^患ひ^國に^歸り^しより。伊^ス把^ニ亞^アの^地

小此^ノ病^ヲ傳^ス。夫^レより^他の^歐羅^巴諸^國に^流傳^セ。故^{ナリ}

なりといふ。その傳^スの始^メ末^ヲ西^史及^び彼^邦の^医書^ニ詳^シなり。

西洋產婆の說

ホルラント

 和^蘭産^婆を^謂て「フルウド・フロウ」といふ。ラテ

ニ語^リてハ「オブステチリキス」といふ。此^ノ方^及び^支

 那^ノい^ふ穩^婆と^ハ甚^ニ異^{ナリ}。其^ノフルウド・フロウ

といふ女ハ少^シ。時^{より}終^身不^犯す。種^ニの^戒行^ヲを

保^チて。尼^ノの^ちなる^者なりといふ。蓋^シ生^ヲを^重ん^ド姦

を^防ぐ^ノ意^ナる^べし。

謹談

彼^方謹^談の^類す^くあり。今^其一^二條^ヲを^左に^記す。

 一^處女^{あり}。夫^レより^孕め^り。何^レ人^カを^詰り^て

曰^フ。姐^ニ誰^人と^私情^ヲを^通して^然る^ヤ。答^テ曰^フ。つ^つ私^情

何るもたなり。曰す。夫婿なり。まこと私情をくして。何と以て孕めるや。處女のしそく。時ニ「ナクト。メルレイ」あり。豈ちその感に於て然るものなるらん。「ナクト」ハ夜なり。メルレイハ北馬なり。二言を合して。夢は魔い。そく。ナクト。メルレイ。まはらば。まはら。ハ「ベングスト」。

一酒徒有り。酒を嗜むもの甚ち。よりて。其眼を悪ふ。醫師カルドウアといふ人。之を戒め。曰。足下の病。酒を禁ずべし。酒徒曰。酒のなきは。ちろちろ。ハ宜く酒を禁ずべし。酒徒曰。我酒を飲め。果して眼を損ひ。然らば。酒を飲まざれば。たハ寂寞なはず。我身を損す。寧ろ小なる。

窓を閉塞せしむるも。大なる家を壊損せしめんと欲するもの。

薬を服せしめてよく飲食をすむる方

奇方秘苑曰。凡食飲を失ふ者。多くハ胃の敗壞するより。てなる。然る後。よく他の諸病を生ずる。至る。さ。さ。治。易らざるもの。症。よく。よく。か。居恒膳。就く食す。と。又。是を厭ふの意あり。たとく豊饌美味。對す。又。是を厭ふの意あり。強いて食。多。吐逆する者あり。予が一親友。一の園圃を管する。醫官の許。赴。奇異

非常の藥草を觀ると甚多し。此時もあはしく常下有ると
 立ちの草は一種の駭く^{オドロ}處に功あることを知りて以
 ふ。ち其園の園丁^{エニテイ}我友人を導き^{ミナシ}て其貴重なる苑
 園をよく悉觀せしめしむるよしあり。我友歸るものぞみ
 て是を謝するも貨をもちてせしむ。彼園丁より一箇
 の秘事藥を用ひしむ。よく飲食をさくむるの法を傳
 へし。ち其いん^イん^ンと^トな^ナも^モば此時は我友人數日以前より飲
 食うつす^スま^マざるの症を得てな^ナも^モより。此事を
 の園丁よか^カり^リ。園丁ま^マも^モち茵陳草を兩手掌
 一捧^サげ^ゲ来りて曰此葉を莫大小の中^{カハラヨニキ}にお^オび履^{クツ}の裡足^{ウラ}踏^{フミ}の
 せ^セて

下のい^イも^モあ^アは^ハて。毎朝其新なる葉をい^イも^モあ^アへ^ヘ。初の葉を
 除^カく^クべ^ベ。然らば則能食する^スことを得^トる^ル。友人是は
 後^{ノチ}に^ニ右の如^カくも^モ。果^タし^シ平癒^ユせり。その後
 い^イも^モあ^アは^ハて。予もす^スこ^コ此症を患^シひて。諸食物を
 吐^クて^テや^ヤん^ン。温^ナる^ル食物の香を輒^カぢ^ヂ。忽^ト嘔吐^ウを
 催^メす^ス。よ^ヨう^ウ偶^ニ此事を彼友人は語^ル。友人の曰此
 方信^ズず^ズる^ル。足^タら^ラざる^ルが如^カくも^モ。我^ガも^モ彼園丁
 より此方を受け用^フむ^ム。ま^マで^デは病^ヲえ^ス。効を得^ルる
 と^トな^ナも^モばす^スづ^ズち^チも^モ用^フる^ル試^シむ^ム。ら^ラる^ルべ^ベし^シと^ト。い^イも^モあ^アは^ハて。
 予^ノす^スづ^ズち^チも^モ茵陳^{イン}を採^ルり^リ。其葉を莫大小の中^{カハラヨニキ}に入^ルこ^コ。

毎日葉を換へて是を試むる。凡二月有餘して病
全く癒えし。食するも二人を兼ねる。いづれを便知
る。あま真よたぐひなきなる経験の良方にして且こと
行ふことも又甚容易。茵陳草の如きも都鄙を論せば
處は随ひて異なる多く得べし。然るやたハ別は藥は服
さるるもあく。且諸貴重なる健胃の藥及び拔ル撒摩
等の貴品を重價を以て購ひ求むるも及ぶ。此
容易ある方を以て失ひしる食飲を元よ復すると豈
一奇快はあらばや。予すてはさきよりしてのち恒ふ
む。是を以て功を奏するもよろして一二の親友は此法

を教ふるも。たゞめ聞とてたハ皆笑ひて信せざりし。試
み後ハ大よ効を得りて感謝を受くること多かり
しなり。

薔薇を以て香竄たるもの法

同書よ曰予が友ハ一園丁あり。かつ把理斯拂郎察國の都なりの
地に旅行するもよろして予が友は贈るも少の旅用の
貨を以て園丁にたのむ。是は報ずるも薔薇を以て太
芳香を以て。此法を傳へし。其法は薔薇樹の
附近に葱ヒトモシを土中サカサに挿入する。其の薔薇樹株の
多少は後して葱はさきよ應へて多少なり。然る

と此ハ薔薇ハ非常の芳香有りて其花より採るところ
の露すこたなすこく香竈サンよふつ薬用よ入るて功最大る
るを以て製薬家殊よ好んく是は購アカチフふたり

卵中の文字を書するの法

同書曰ちこも戦争の時節よあつりて遠方へ秘事を
告んとするも其間の道路を敵人阻絶セツしてあへく信を
通しうききの節よ用あるものなり其法没食子と明
礬とを酢カクとて卵の殻上カクの字を書しとよく
是を乾カクう其後三四日間ちまき成はれ酢の中へ投
してのちよ又ちまきを乾カクう遠きよ送る途中よて人去

きを見るもあへく知るもなす彼方よ送り至るも及
いて彼カクその卵の殻を去るバ白上よ文字有りて事辨ず
べしまも明礬没食子并びよ酢を以て殻上より書き
よくちまきを乾カクうてのち其卵を鹽水中よ投して
煮ると一時此方の半時むらりすまバ殻上の字ハ消散す
中の白よ字存すなり

又一方新なる卵をや久しく酢の中よ投しおけバ殻
柔もなる此時「ラシット」カ機を以て長くちまきを裁サイ
て其中小小紙牘を納る酢より出づあやバ卵キレを
たじ堅し卵のきれめをば石灰すハ蠟を以て塗るべし

志ろきども塗りしるるところはとバ自見とやきし。前の
法よちるべ。

石上の文字をなす法

同書小曰一の石を採りてよくあきをほららめ。蠟を溶
して其上よ字を書し。是をつよき酢よ投すこと十
二時此方の六時ゆして石を取出し。その上なる蠟をさそ
落せむ。字石上よ存し。あへく消えればと。落忠銘誤其下疑脱數字
按し。草木子よ云。龜尿テウ可以和墨。寫字入石。貝原
大和本草附録よ此説を載せし。日本よ昔佛
經よ石よ書くよ。其文字久く脱せむ。ハ此法なり

とつ今も其石つり。本朝食鑑よ龜尿を取る法。
漆盆上よ置きて。鏡を以て是を照せむ。出づ。一説
よ。蒼耳子油を以て墨オナモミとす。文字を書せば。石
中よ入りて長く脱せむ。或曰芸香ウヰを油墨よ入。蛤
粉の末をす。石よ書せば。脱せむ。云ニ其事稍
似るるや。是よ附記。

金の量と重くする法

同書よ曰。新なる馬糞を採りて。其汁を搾り出。あき
よ黄金を投して後。是を出せば。則其量よく重くなる。
猩二絨を染める小蟲の説

猩ニ絨ハ「コシ子ルラ」といふ小蟲をいつる色其血をいつて
漆の成すところのものをいふ。今西書所載の説を採り
左ニ翻譯して考證を見よ。

ウライツク醫學實函曰「ラテン語「コシ子ルラ」
「コシニルラ」といひ和蘭は「カシ」と「コシニエリ」
といふ其形小く平片三角あるハ四角は分り
顆粒をなす外面ハ銀色をしりて裡面ハ赤し
伊斯坦布爾國の人多く西方亞墨利加洲より得來る其物多く
無花菓樹に附く字露國（亞墨利加の中にある大國は伊斯坦布爾國に屬す）の
心を用ゐてカシを採取すまづ諸厄利亞國の人テイツシ

かしまく「コシ子ルラ」ハ即小蟲の一種なりて無花果樹
の葉に附て生じ今生藥舗中カシを分けて四種と
なり其第一ハ拂郎察國の人呼びて「ラゴセルレ」ステ
クエといふ是すなまら我輩恒は多く見るとテその者
あり第二ハ「コシオ子ルラ」カムベシカナ」と名く上よ
い第一種のものより比きまバ粒ニ聚りて塊をなす色
ハ他品より最赤くしりて且不潔のもの多く其中は
雜多し第三ハ「コシラ子ルラ」テトレカウラ」と名
くカシハ平地に産する者よりしりてカムベシカナ
カシハ樹の名なり多く北アメリカの下よあつて是を得る
カシの地は産れりて染料となす

り。第四ハ「ウ井ルデ。コシ子ルラ」と名く。是ハ大葉の
 地榆木の根の下において、ちきを得るなり。凡右の四種
 して第一種の者を以て、上好の品となし、藥局の中、ちきを
 以て「アクツア。ヒツタ」藥水の名と製し、或胃の病に用う。その
 藥水よ色をばけく、赤うくしめ、又小水を通する良藥
 とし、漆匠の專是を用ゐく。種ニの段足の類を漆むることをなす。
 ヒブ子ルスガ萬國傳信紀事よ曰、「コセニルレ」又「コシ子ル
 ラ」ましく「コシニルラ」と名く。其色赤くして美麗なり。去
 き即一種の小蟲の乾きて化生するものなり。その形
 「ウエエグ。ロイス」木虱の類よ似たり。ちきを壓し、ちきり出た

の液汁ハ、漆匠以て色を深むとちきのものなり。此物
 多く「亜墨利加洲」中、産し、すなわち「無花果樹」に似
 る一種の樹上、附生し、亜墨利加の土人、哆囉絨を以て
 其樹下、布たてのちき、其小蟲をちきりげ落せば、則此
 蟲よく速く死す。しふ、ちきを世よ名ありて、人の貴重
 するところの「コセニルレ」ちきなり。然るども、此物特、
 「亜墨利加」の地のちきを産するより、ちき、ちき、ちき、ちき、
 「瑪尼亞國中」ホレイゴニムムの地「シント。ヤン」とりへる所の
 邊の樹下において、一種の赤くして、大さ穀粒の如き
 のちき、産し、世よ是を名き、く「ヨハンニス。フルウド」といふ。

是を以て人を誑アガムれて、真正の「コシニ子ラ」なりと稱ハシして、
 貿易ハシ以て此赤た粒の如くなるものハ、まゝ他物あらす。
 赤た一種の蟲の卵なり。赤たを暖處に置き、日光を
 受けしむまば、則よく生育して蟲となる。此蟲血の如く
 なる赤た液汁あり。赤たを以て絹帛羊絨等を洗
 むまゝ都兒格國コカおよび亞爾默尼亞國アルメニアの人ハ「ホールセ
 ヨーデン」の地より多く「ゴツキユス」一名カレシニと云い
 「コシニ子ラ」は似てを購アガナひ得て、以て哆羅絨絹布皮革等を
 洗む。是を名も「サツヒア」といふ。すまゝ赤たを洗
 馬の鬣クテカミおよび尾をも洗むるなり。藥局の中にて、あつ

キユスの汁を搾シホり出だして、以て「ケルメス」汁に代へ用
 う。「ケルメス」は「アルケルメス」すまゝカレモゼインと云い、似たる樹なり。其實ハ藥に入る。その功はほたのなり。その後
 メシユアといふ人撰するところの書を云ふ。ソレも「ゴツ
 キユス」を「アルケルメス」上のケルメの製法の如くよきまじり
 其功少々なりといへる。我輩は此拂郎察國フランスより出だ
 ところの汁を見るよ。全く「ゴツキユス」の汁なり。モント。
 ペルリールの地 拂郎察國 馬邑の地。少ありて此蟲をとりめ製する
 ものなり。藥用は供じて、其功ハアルマニア國より出だ
 者と異なる。なす。ならびよ。元氣を補助するの良藥なり。
 是れ此「ゴツキユス」の汁は、新なる佛手柑汁を加へ製し

て其氣を引いぶ。ちきを紙に漬して顔料となす。まき
と「カルタ。ヂ。ス。バグナ」と名く。まきは類よ。ベセツタ。リュ
ブラ「ラテシ語」一名「フランケット。ツツク」と名くる者
あり。和蘭語「フランケット」ハ類料なるは。此汁は漬して製する
り。ツツクハ布巾の類なり。

まきボイスが學藝全書を按よ。コシ子ルラ「蟲」其
形半圓なるがてくくして。其種類すく多く。第
一種ハ赤翅の上よたぐ二の黒點あり。第二種も
赤翅の上よ長く白た筋及び斑點あり。第三種も
赤翅の上よ七の黒き斑點あり。此種ハ「アングリア」諸厄利亞國
とらものものなりといふ。

中よ甚多し。名けく「ユフフロ」。クウ「といふ」。第四
種ハ翅黄よ。第五種ハ翅黒し。ちきら皆翅の色。及
び斑點よて。類を分つものなりといふ。其書唯翅のてを載せ
他事も畧し故に附するもの

ゴウデ。ヒツスの説

ゴウデ。ヒツス和蘭語「ゴウテ」ハ金
も。一種の小魚なり。清き
湧水の中小生じて。形状美麗なり。其背金色なり。腹
ハ銀色よ。両傍ハ赤色なり。黒き斑點皮上よ散在。尾も
幅廣く。金黃色よ。其肉ハ柔なり。味美なりといふ
此方よいふところ此金魚と稍相似たりといふ
則意蘭島の異草の説

則意蘭島東印度の内崑崙勃和蘭より鎮守の地の府城の近邊
 一種の大なる異草を産び是を「プラタゲスラトリア」
 コラピリス」と名く是水を搾りて其奇異なる草と云義なり此草陰濕の地は生じ其
 葉の傍より多く水を滴下して自凝りて桶の如きもの成
 して曲りて下に向ふ其形角は似たり其質ハ木皮に似て色は
 黧黒色なり和蘭の人又名をて「ドイフルスボム」といふドイフル
スハ鬼神なりホーハ樹なり是此桶の如きもの未熟なるの間を
其奇異なるよりて名くるなり上は蓋ありて是を塞ぐ熟する及びてハ人指を以て其上を
 壓して口を開くは甚容易なり其桶の如きものの中ハ皆水
 なりスナチツイ便就て是を飲む其水極めて清冷甘美なりてよく心を

強くするの良薬なり。

工鄂國の奇鳥の説

アフリカコンゴ亞弗利加洲工鄂國は一種の異鳥を産び名けて「エンチーネチ
 」と云其皮甚美なりてすべし斑點あり此鳥恒は空中に飛
 翔して敢地アムテ下らば唯時ありて高樹の上は止まるもの若誤り
 て地は下まば忽ち死に故は其地は於て是を得ると極めて
 稀なり其價甚貴重なり王侯貴人の是を得て服とな
 し其以下ハ敢用アムテるものと能アタとびとふ。

西洋雜記卷四終

西洋雜言 卷四

廿八

山村才輔著

嘉永元年戊申三月刻成

日本橋北十軒店

江戸書林

鈴木文苑閣

播磨屋勝五郎藏板

010190533900

48 13113

